

被災地の「15歳」に無料学習塾

大槌 高校受験シーズン控えNPO設置

高校受験シーズンを迎えた中、大槌町の上町ふれあいセンターに開校した無料の学習塾「大槌臨学舎」で、約90人の中学3年生が、地元の塾講師から英語や数学を学んでいる。公立高校一般入試の出願期間は6～10日で、試験は3月9日。

臨学舎は、津波で自宅や学習塾を失った受験生に落ち着いて勉強できる場を提供しようと、東京のNPO法人「カタリバ」が設けた。昨年12月に仮開校し、今年1月23日に開校式を催した。自習室としても開放している。

通っている大槌中学3年の菅野勇也さん(15)は「仮設住宅だと幼い弟がいて集中できないけど、友達と一緒に勉強する意欲が出る」と話していた。



中学3年の受験生向けに、地元の塾講師による英語の講義が開かれた。大槌町の上町ふれあいセンター、上田潤撮影

志望校選び 地元志向も

県立高校入試の出願を目前に控え、受験生の志望校選びも大詰めだ。自宅や学校も被災し、通学に使うはずだった鉄道の不通が続く被災地の「15歳」の中には地元志向も見られる。

3年生113人が在籍する大槌町立大槌中学校。例年、過半数が地元の大槌高校を、約4割が釜石市内や内陸部の高校を志望しているが、今年は大槌高校の志望者が例年より約1割多いという。三浦剛副校長は「町外の高校に行くことで親に負担をかけたくないという気持ちもあるのかもわからない」とみる。

同町と釜石市をつなぐJR山田線は復旧のめどが立たず、代替バスが走っている。志望先を大槌高校に絞った藤原雄大さん(15)は当初、釜石商工高校にも興味があった。「情報の勉強もやってみたかったけど、親

鉄道の不通、親への負担など影響か

が遠いと心配するので」同町で無料の学習塾「大槌臨学舎」を開設したNPO法人カタリバの川井綾さんは「震災直後、3年生は大槌高校に間借りしていたため、雰囲気を知っていることも後押ししているのではないか」と話した。

三陸鉄道南リアス線の不通が続く大船渡市では、釜石市の高校から地元の高校に志望先を変更した生徒もいる。校舎が被災した陸前高田市の高田高校が、大船渡東高校の萱中学校舎を使っているため、「通いやすくなった」との理由で選ぶ生徒もいるという。

一方、陸前高田市の中学校では、例年とほとんど変わらないという。地元の高田高校まで無料のスクールバスが走っている、との要素が大きいとされる。

(高橋諒子)